

Title	世界商品價格の決定(中)
Author(s)	作田, 莊一
Citation	經濟論叢 (1930), 31(4): 521-536
Issue Date	1930-10-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/129941
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第

卷一十三第

行發日一月十年五和昭

論叢

戸數割に於ける矛盾 法學博士 神戸 正雄
米國文化社會學 文學博士 米田 庄太郎

說苑

世界商品價格の決定 經濟學博士 作田 莊一
歸屬理論の一考察 經濟學士 柴田 敬
獨逸舊稅制の崩壞と財政調整法 經濟學士 中川 與之助
德川時代の藩營專賣論 經濟學士 堀江 保藏

雜錄

戸數割に於ける資産狀況に依る資力算定方法 經濟學士 安田 元七
信用及信用組織 經濟學士 中谷 實
經濟學全集「統計學」を讀む 經濟學士 蜷川 虎三

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（纂 轉 載）

世界商品價格の決定（中）

作田莊一

三 國際必要分業と商品價格

國際各別分業が世界商品價格を特徴付けることは前節に於て一言したるが、今少しくその點に就て補説して置きたい。國民間に生産の要素及び條件が移轉し得ない限りに於て成立する生産分業が國際各別分業であるが、それは今日までの國際分業の中にて廣い範圍を占めてゐる。この分業形式では、分業參加者の間に共通の社會的生產基礎が存しないから、こゝで分業組織の下に行はれる社會的生產と言つても、交換財貨の生産が分擔される點に於て社會的產物が生産されると言ふに止まり、それは國內のやうに生産要素及び條件が自由に移轉されて物質的生產の過程及び産業經營の構成までが分擔され、従つて各種産業が同一の社會的生產の基礎の上に立つ所の完全なる社會的生產の階段には達してゐない。各別分業及び產物交換にあつては、移轉される商品の價格が社會的生產費又は社會的勞働量に基いて決定されると言ふ法則はまだ適用を見ない。例へ

ば古代國民の交換經濟時代にあつては、一農民の生産せる或農産物と一工人の生産せる或手工品とが交換されるとして、その價格の評價過程に於て二つの産物に要したる生産費又は労働量を同一の標準を以て計量することは出来得ない。労働價值説の如きも近代國民の共通分業に到つて始めて問題となり得る。かくて今の國際生産分業と言へども、各別分業に於ける交換價格は、原則としては古代の交換經濟に於ける價格の再現と見てよい。

商品の價值はその生産提供費に由來するといふことは、商品の性質上明白なことである。その生産費も、共通分業にあつては社會的生產基礎によつて社會的に決まつて来る。そこに社會的労働價值説が主張される根據がある。然るに各別分業にあつては、商品の側にて生産費が價格決定力を有すると云ふことだけは明白であるとしても、各交換當事者の側に於ける商品の生産費は、同一の社會的生產基礎を有しない點に於て直接には對比され得ない。リカルドは比較的生産費の差異を説明するに當つて、イギリスとポルトガルとの間に於て羅紗と葡萄酒との生産に要する労働費用が、イギリスでは共に多くポルトガルでは共に少いにも拘らず、二國間に二財の交換が起り得ると説いてゐる。しかしこの場合に羅紗に於てイギリスの一〇〇人労働とポルトガルの九〇人労働との對比又は葡萄酒に於てイギリスの一二〇人労働とポルトガルの八〇人労働との對比は、必しもイギリスに多くポルトガルに少いと決め得られないことは、譬へば採點の標準が同一とは決まつてゐない二人の教師が付けた一人の九〇點が他の一人の付けた八〇點よりも高く評價されてゐるとは言ひ得られないやうなものである。同様にまたリカルドが、若し二國間に勞資の

移動が自由であつたならば、イギリスの勞資はポルトガルに移動して二國分の羅紗と葡萄酒とを生産して分配することが、イギリスの資本家並に兩國の消費者にとつて有利なることは疑を容れぬであらうと言へる點も、決して疑ひ得られないことではない。二國間に於て同種の財貨の生産費が直接に對比され得ない以上は、各國に於ける二つの財貨の生産費を加へたるものも亦直接には對比され得ない筈である。一方の國の生産費が多いにも拘らず尙ほ比較差によつて分業及び貿易が行はれると見たるリカルドの説には、自己矛盾が存するやうであり、少くとも論旨が徹底してゐない。この例で言へば葡萄酒の生産費の如きは二國の富源生産力の厚薄と大なる關係がある。一切の生産要素及び條件がイギリスとポルトガルとの間に自由に移轉し得てその間に共通分業が成立し、共通の基準によつて生産費を計算し得るとき、始めて或財貨の生産費は一國に多く他の財貨の生産費は他國に多いと言ふことが出来る。各別に存立するものに就ては各別の立場から二者の優劣を判別することは出来ない。斯の如く商品の價格は必然に生産費に基いて決定されどしても、各別分業商品と共通分業商品とに就ては、各別生産費と共通生産費との區別を立てゝ見なければならぬ。然るにこの各別生産費と云へども、各別分業が必要分業なると便宜分業なるとによつて、商品價格の決定に働きかける作用を同ふしない。先づ國際必要分業に於ける商品價格の決定事情を尋ね見るであらう。

リカルドは國際分業が専ら比較的生産費の差異に基くと見てゐるが、それは交換される財貨が輸出品のみでなく輸入品までが國內にて生産され得ることを前提とする。然るに輸入品の中には

輸入國が生産要素の缺如又は貧弱なるによつて、全く又は或數量以上は國民の消費需要があつても生産提供の不可能なるものがある。かゝる財貨は輸入に須つ外なく、その輸入を必要輸入と名づける。これと異り或國に於て或財貨の生産要素が具はり必しも生産が不可能ではないが、それらの品質が劣り又は生産條件が不備なるによつて、その財貨の生産費が、二つの生産の收益を對照し見て、他の財貨の生産費に比べて多きを要するとき、この不利なる産物を生産費以下の犠牲にて他國より求めようとし、生産に代へてこれを輸入する。かゝる輸入を便宜輸入と名づける。勿論この必要輸入と便宜輸入との差別は生産事情の變化と共に變轉するが、一定の時期に於ては輸入によつてのみ國民需要を充たし得るか、有利の輸入を行つて國産に依頼することを避けるかの二種の輸入が區別され得る。而して必要輸入の對立は必要貿易であり、これには國際必要分業が前提となつて國民の間に有無相通する。便宜輸入の對立は便宜貿易であり、これには國際便宜分業が前提となつて國民の間に長短相補ふ。これら二種の貿易は各別分業の形式を異にし、從つて商品價格の決定事情も亦自ら異らざるを得ない。

國際必要分業による貿易にあつては、各國民は輸出の側にあつては互に商品を提供するが、輸入の側にあつては輸入品が國內にて生産され得ない所から用品としてそれを需要する。従つて必要輸入品に對する輸入國民の評價には、自國の生産費は考へられず、又各別分業なるを以て輸出國の現實の生産費の多少も輸入國にとつては何の關係もない。輸入される用品の價值は商品價值ではなく、一に國民需要より見たる效能價值に外ならぬ。然るに輸出品は商品なるを以てこれに

は效能價值は問題でなく、唯だ經費價值のみが與へられる。されど交換の場合の輸出商品は、これを賣つて代價を取得する商品ではなく、却つて輸入品を取得する代價となる所の商品なるを以て、即ちそれは恰も流通の場合に購買に充てる所の貨幣と同様の任務を持つを以て、輸出品の生産費の多少は流通商品の生産費の如くに自己の價格を決めるものではなく、寧ろ輸入品の價格を決める尺度となる。換言すれば、輸入品の代價をなるべく少くすると云ふ點に於て生産費の多少が顧られ、その意味の生産費の額が輸入品代價の額を決める力となる。かくて輸入品に對する評價はその效能價值に對して輸出品の幾許の割當を肯んずるか云ふその額で評定される。尙又輸出品は凡て交換的需得能力として評價されるが、それは貨幣が一般的需得能力なるに比べ特定需得能力であり、輸入品の代價としては必しも一定せる輸出品を以てするには及ばないから、相手國に需要される種々の產物が交々代價として輸出される。換言すれば種々の輸出品が綜合的に貨幣の如き一般需得能力を形成するのである。然るに貨幣は唯一通りの單位價值を具へるが貨物はそれそれの一定の生産費によつて單位價值を異にするから、それらの生産費の比較的多少が輸入品の評價に差異を生ぜしめる。この點では比較される生産費が輸入品の價格決定に參與すると云ひ得られるが、しかしそれはリカルド説に謂ふ所の二國間に於ける比較的生産費の差異に由る價格決定とは全く別の事情である。斯の如く貿易當事國民は互に必要輸入品に對する評價を試みるが、この双方の側の評價が互讓を許し得る相反的評價なるとき交換が可能となり、相互の需要強度が二者の評價の中間にて或落着點を見出すやうに均衡を得るとき、そこに一定の價格が決まる

のである。

以上の價格決定事情は實物交換の場合であるが、國民貨幣制が確立しそれらの間に爲替關係が成立し國際貨幣交通が行はれるに至れば、實物交換が貨幣を媒介とする賣買式交換に變轉する。この際には交換が形態的に分解され、個々の財貨の移轉に就ては輸入國と輸出國との對立となり各國民が輸入品に對する評價及び代價給付は輸出品を表現する所の國際貨幣を以てせられる。即ち輸入品の需得能力は種々の輸出產物の綜合でなく、唯一の貨幣を以てする對外購買能力に轉化する。物と物との交換は依然として存續するも、貨物間の交換の身代りとして貨幣間の交換が新たに出現する。かくて輸入品に對する輸入國の評價はその效能價值に對する對外購買資力の割當額を限度となし、同じ財貨に對する輸出國の評價は單なる商品の提供なるを以てその貨幣的生產費を限度となし、二つの評價は爲替關係を通じて同一の基準にて計り得られる。價格は二つの限度の間にて需供の均衡によつて決定される。

貨幣を媒介とする賣買式交換は、交換の機會を増し得るやうに交換の過程が複雑になつたのみで、交換の本質には變化なく、その點は貨幣によつて貨物配給を行ふ賣買流通と異つてゐる。實物交換にせよ賣買式交換にせよ、孰れにしても必要貿易に於ける輸入品の價格は、その財貨の輸入國に於ける生産費に依ることなき點に於て便宜輸入品の價格と著しく異なる。従つて輸入國は輸出國の側に供給競争ある限り低い價格にて輸入し得るが、さうでなければ輸入國の需要の切なるほど需得資力の割當が許し得るだけ高い價格にて輸入せざるを得ない。必要輸入品の多い我國

の如きはその點に於て大なる弱點を有する。

必要貿易に就て以上に述べたる所は國民が交換當事者である場合を見たのであるが、貿易國營の場合には正しくその通りの價格決定を見るのである。然るに多くの場合には貿易は商人が行ふ所であり、商人は果して國民の立場から評價するであらうか、疑はれる。しかし商人の固有の欲求は利潤の取得に存し、利潤取得は社會的機構によつて嚴に制約されるから、商人の意嚮は國民の需要事情をも生産事情をも變更するものではない。商人は唯だ貿易の機關であり、この機關は國民の需要の種類及び強度と需得資力とに基いて必要貿易を爲す所の國民の行動を代辦するのである。

四 國際便宜分業と商品價格

國際各別分業の他の一種たる國際便宜分業にあつては、リカルドの唱へたる比較的生産費説が正しく妥當する。必要分業にあつては輸入品は全く又は或程度以上は國內にて生産され得ないことを前提とするから、その國內生産費は問題とならない。然るに便宜分業にあつては、輸入品が國內にて生産され得ることを前提とするから、こゝではその國內生産費が貿易價格に參與することになる。各別分業である以上は同種の財貨といへども社會的生産基礎を異にするから、一國と他國とに於て孰れが多く生産費を要するかは直接には對比され得ない。されど各國では種々の財貨が同一の生産基礎の上に生産されるから、同一の基準によつてそれらの生産費の多少が比較さ

れ得る。従つて交換さるべき二つの財貨の各國に於ける生産費の比は互に對照され得る。かゝる對照が謂ゆる比較的生産費の差異であるが、この差異に於て双方の國が互に反對に長所と短所とを有するときは、各國は分業及び貿易によつて長短相補ひ短所を捨て長所を發揮することによつて、短所とする生産に於ける生産費を節約する結果を生ずる。その節約の中に便宜分業及び貿易が自給に優る所の利益が含まれる。勿論この生産費關係は直ちに便宜分業及び貿易を惹起す前提でもなく、まして原因でもなく、それは唯だこの種の分業及び貿易を成立せしめる基礎たるに止まる。されどこの基礎がなければこの分業及び貿易は起り得ない。この點に於て比較的生産費説は國際貿易の成立を説明する能力なしと批難するは當らない。それは唯だ世界貿易一般又は國際貿易全部の成立を説明するに足らないのみである。

然らば國際便宜分業より来る國際便宜貿易の商品價格は如何に決定されるであらうか。それには先づ輸入品の國內生産費が價格の最高限となることは明かである。價格がそれを越ゆれば生産費節約の結果が得られないで國內生産が輸入に代るからである。次に價格は輸出國に於ける輸出品の生産費を最低限となすことも亦明かである。蓋し輸出品は單なる商品であり、輸出國は生産費以上の價格を求めからである。かくて各當事國は相手國の產物たる輸入品の一單位に對し、二つの交換財貨の自國に於ける生産費の比に由つて、交換に於ける輸出品の提供單位量の最高限を定め得る。評價を同様の表示法にすれば、一方の國に最高限が、他方の國に最低限が定め得られる。交換價格はそれらの間に於て相互需要の均衡によつて決定されるのである。かゝる比較的

生産費の差異による價格決定の見解に對しては、國民が對外貿易に際して評價するとは考へられない、評價する者は商人であるが、商人が交換財貨に就て國民經濟の生産事情に基く評價を試みることは實際にはあり得ないと、反對する人も少くない。私は試みに一例を挙げよう。日本の生産費或はこれに基く市價の比較に於て、棉布の一單位當りが十五圓、牛皮の一單位當りが二十圓とする。支那の生産費又は市價では棉布の同分量の一單位當りが十二元、牛皮が十元とする。この圓と元とは取換へられない各別の貨幣とする。さすれば日本では棉布四單位を賣れば牛皮の三單位が買ひ得られ、支那では棉布五單位を賣れば牛皮の六單位が買ひ得られる。支那の貨幣の價値が激變するとき、それから来る危険を避ける爲に數々試みられるやうに、今支那に在る日本の一商人が、日本から單位當り十五圓の割合で棉布を買取り、これを支那にて少し廉く十一圓の割合で賣り、直ちにその貨幣にて牛皮を少し高く單位當り十一圓の割合で買ひ、その牛皮を日本に送つて單位當り二十圓の割合で賣るとせば、十五圓にて二十圓を得る割合となる。この際に運送其他の經費を差引いて剩餘あらば、如上の取引が行はれる。かゝる場合には圓と元との價値が如何なる關係にあるかは全く問題にならない。又支那で左手に賣り右手に買へば、支那の貨幣の價値が如何に激變しようとも構はない。この場合に商人の評價は生産費關係に基くものであり、生産費關係は社會的に定まり商人の左右し得る所ではない。商人は國民經濟の機關として働き、彼が棉布を輸出しこれに代へて牛皮を輸入するは日本國民の行ふ交換の表現である。取引によつて商人は利益を受けるが、その利益は總體的に見て日本國民經濟の利益である。それは國際分業から

來る國際分益の一部である。

國際分益の割合は價格如何によつて定まる。上例の價格は、日本商人が能動貿易をなせる場合であるから、日本にとつて甚しく有利なる價格となつてゐるが、支那商人が日本に在つて能動的に出るならば支那にとつて有利なる價格となる。双方が能動的に出るならば、上の例で言へば、日本側の牛皮六單位につき棉布八單位以下、支那側の牛皮六單位につき棉布五單位以上の間に於て、双方の需要の強度が均衡を與へる點に價格の決定を見るであらう。商人は兩國に於ける比較的生産費又はこれに基く市價の差異を知る。生産費關係は便宜貿易の成立基礎となる。この基礎を知る商人が貿易を實行するのである。重ねて言へば、各別分業にあつては同種同量の財貨を生産する經費の多少をば國を通じて直接に比較することは出来ない。日本と支那とに於て棉布の生産費が十五圓と十二元とであると云つても、或は十五人勞働と十二人勞働とであるとしても、また十五日勞働と十二日勞働とであるとしても、その數字では日支孰れの生産費が多いとも少いとも斷定し得られない。二國が對照され得るは唯だ二財貨の比較的生産費の差異のみである。そこに共通分業と異なる特色がある。又均しく各別分業であつても、必要分業にあつては各國が唯一種の交換財貨を生産し得るのみであるから、比較的生産費の差異を見ることはない。そこでは輸出品の數量を以て輸入品の效能價值を表はすに止まる。便宜分業となれば、必要輸入品の效能價值に代つて便宜輸入品の國內に於ける生産費が經費價值として評價過程に入り來るのである。勞資移動の困難なる場合には貿易價格は凡て比較的生産費の差異に基いて定まると見ることが謬つて

ゐると同時に、同じ場合にもかゝる價格決定事情が凡て國際貿易に特殊なるものでないを見ることも亦謬りである。

以上述べたる價格決定の事情は已に各國に貨幣交通が行はれ居る場合であるが、この事情は國內に貨幣が流通しない時代に遡つても同様に肯定され得る。しかし實際に於ては貨幣を介せずしては精確に生産費の幾許なるかを計算され難く、又貨幣交通を見ない古代の國民經濟は國內でも尙ほ共通分業とならない各別分業時代であるから、國內にて生産される種々の財貨の生産費をば共通の基準によつて比較することも出来難いのである。國際便宜貿易が行はれる時代は已に各國民が概して資本的商品の生産を試み、貨幣價值の支配の下に立つ時代である。従つて生産費を何人分又は何日分の労働量と言ふが如きは唯だ説明の型に過ぎない。しかし國民經濟が已に貨幣經濟の時代となつても國際交通に於ては尙ほ比較的生産費の差異に基く分業及び交換が行はれる。各別分業の下に於ける財貨移轉は流通でなく交換なるが故に、上述の例の如く彼我の評價を経て價格決定に達するまでには、頗る複雑なる翻譯的評價を必要とする。この翻譯の煩勞は交換の發展を拘束する。かくてマリアテレジア・ターレルやメキシカン・ダラーの如きエスペラント式貨幣が現はれてこの煩勞を減少せしめた。進んで各國の貨幣制度が確立して來れば、こゝに始めて國際爲替關係が成立する。これらの場合にも國民の立場からは交換の本質は依然として變らないが、商品移轉の形態は賣買式交換に變ずる。

賣買式交換にあつては單なる需要者と提供者とが對立してその間に財貨の移轉を見るが、それは

もと交換が分解されたものであるから、國民間の交通としては幾多の賣買が結合されて國際交換の實を擧げるのである。されど個々の財貨の移轉に就て見れば、爲替關係を通じて輸出と輸入とが別々に貨幣の受拂を伴ふて行はれる。かくて貿易價格の決定も亦その形態を變ずる。爲替關係が成立し爲替相場が決定し居るときは、一國の貨幣は直ちに他國の貨幣に換價し得られる。例へば日支爲替が百元に付き百四十圓とする。さすれば支那の牛皮の生産費又は市價十元は十四圓となるから、これと我が生産費又は市價二十圓とが牛皮の輸入價格の限界をなす。又日本の綿布の生産費又は市價十五圓は十元七分の五となるから、これと彼の生産費又は市價十二元とが支那の綿布輸入價格の限界をなす。これらの場合には二財貨の比較的生産費又は市價の對比ではなく綿布のみ又は牛皮のみの生産費が直接に比較されて一財貨の賣買價格が決定されることになる。かくなればそれは絶對的生産費又は市價の差異に基くものに外ならないで、比較的生産費又は市價の差異に基く價格決定は廢除されたやうに見える。またかく見る人々はその故に比較的生産費説を否定する。されどこの場合に價格の決定事情が比較差から絶對差に變じたるは、専ら爲替關係が成立し、それを通じて一國の貨幣が他國に於ける購買能力となり得るからである。然るにその爲替關係及び爲替相場は何から生じたかを尋ねるに、それは對外貿易が頻繁に行はれるに従つて、初め一人にて輸出及び輸入の交換を行つてゐたものが、輸出するも輸入を欲しない者と輸入するも輸出を欲しない者とに分離されて來るからである。先きの例で云へば、支那に對し一人にて綿布を賣り牛皮を買ふ所の交換が分離されて、甲が支那に綿布を賣りその貨幣債權を乙に譲渡

し、乙がその債權にて支那から牛皮を買取ると云ふ風になることが、國際爲替の生ずる所以である。その場合の爲替比率の決定は決して貨幣と貨幣とが直接に對比されて一定の比率を生じたる譯ではない。蓋し貨幣は購買能力であつて、その能力は互に一國のものが他國に通用しない特有のものであるからである。爲替關係の生ずる所以は、已に交換關係に入れる兩國の商品に對して持つ所の購買能力を交換するに存し、爲替比率は貨幣交換以前に已に成立せる商品の交換の比率に基いて決せられるのである。重ねて言へば、爲替關係は一國の輸出商と輸入商との間に於て他國に對する債權債務を決済する爲に起る。その爲替比率は債權債務の均衡によつて決まる。その債權債務は爲替比率の決定に先ちて輸出輸入を行ふからである。かゝる輸出輸入の商品價格は結局爲替比率より獨立して決定さるべきものである。但し爲替市場が一旦成立して爲替相場が定期に決定されるに至つた後には、この相場にて賣買式交換の價格が制約されることはあるが、それとても爲替相場を正動的に支配するものはやはり商品價格であり、便宜貿易にあつては比較的生產費の差異に基く商品價格である。

爲替關係は交換財貨の生產費又は市價の比較差を絶對差に轉形せしめるが、價格決定の基礎は依然として比較差であり、その絶對差は爲替關係に包まれたる比較差である。従つて一旦爲替關係が中止されるときは隠されたる比較差が明るみに現はれて来る。例へば世界大戰中、爲替關係が中絶した中歐諸國の間では小麥と農具との交換が行はれたこともあると云ふが、そこではもはや生產費の絶對差は見えない。露西亞の革命直後にルーブル爲替が中止されたとき、政府は農產

物を磅にて賣出しその磅にて工業品を買入れたが、その場合にも露西亞にとつては生産費の絶對差による評價が行はれなくなる。唯だ貨幣の魔力は異質のものを同様化する。爲替關係によつて國際貨幣交通が成立するときは、交換價格が形態上賣買價格に分解されて生産費の比較差を糊塗する。異質のものも形態を同ふするによつて同質のものと誤解される例は世に珍しくない。

以上述べたる所は、各國の貨幣が自由鑄造を許せる同種金屬貨幣でない所の國際別殊貨幣に就て言つたのであるが、この場合には生産費の絶對差による價格決定は單に名目的であり、實質的にはそれは比較差に基く。然るに各國が自由鑄造を許せる同種金屬貨幣——金貨——を用ゐる國際共通貨幣が成立するに至れば、事情は自ら異つて来る。共通貨幣となれば、各國は貿易によらずとも金貨を現送しさへすれば、何時にても他國の購買能力を獲得して他國の商品を買取り得る。爲替相場は現送二點の間に於て不動の平價範圍を有し、商品の輸出入と關係なく狭い範圍に於て一定してゐる。かくなれば國際社會は貨幣交通の上では一つの市面となつて、一國の貨幣を有するのみにて、如何なる國の商品をもその國の市價にて買入れ得る。こゝに至れば已に生産費の比較差による價格決定が絶對差によるものに、單に名目的でなく實質的にも轉化したと言へる。蓋しこの場合の爲替相場は商品の輸出入から獨立して定まるから、その相場を通じて彼我の生産費又は市價が各國特殊の生産事情を超へて直接に比較され得るからである。正貨の流出入による一國物價平準の上下が商品の生産費及び市價を變動せしめ、それが國際價格を通じて輸出入の情勢を變化せしめることはあるが、しかしこの變化とても生産費又は市價の比較差によらず、絶對差に

よつて起るのである。この點では比較的生産費說の見解に賛同し難い。然らば國際各別分業の貿易も國際共通貨幣の爲替關係を伴ふまでに進むときは、比較的生産費の差異による價格決定は全く克服され了るであらうか。執拗と思はれるかも知れないが、私は尙そこまでは斷定し得ない。便宜貿易價格が實質的にも生産費の絶對差によることゝなつたのは、唯だ貨幣の側から生産費の認定を更改せるまでにて、生産の側からかくしたのではない。生産の側から比較差が絶對差に變轉するのは、生産の要素及び條件が各國間に自由に移轉されて、各國の生産基礎が同一の國際社會生産關係の中に融合された場合、即ち國際各別分業が國際共通分業に轉化せる場合に起るのである。この場合にはたとへ政治的に國を異にしても經濟的には各別の生産區域が撤廢され、生産費は全く絶對的に對照される。然るに各別分業の下にあつては、各國には特有の生産事情が保持されてゐるから、その事情による生産費もまた各國特殊のものであり、同種の財貨といへども決して必然的には同様な生産費の支出過程をとらない。そこには尙ほ生産費の比較差が廢除されてゐない。それにも拘らず貨幣の側からは生産費の絶對差による價格決定を強要する。この點を譬へて言へば、學校がそれぞれ長所と短所とを有する多くの生徒に對して劃一的教育を施し、平均點にて生徒の學力の優劣を決めるやうなものである。この場合に或生徒は劃一的教育によつて甚しくない長所と短所とが平均されて凡庸の性能となることもあらう、また他の生徒はその教育を蒙りながら著しい長所と短所とを保持して行くこともあらう。その如くに共通貨幣によつて生産費の絶對差による價格決定が行はれるとき、或産業はそれに順應して比較差の特色を失ふも、

他の産業は絶對差による價格決定の中にて比較差による價格決定力を貫徹する。例へば優れたる富源生産力又は技能生産力によつて生産されたる商品は、たとへ生産國の物價平準が他國よりも高くとも、絶對差を以てする國際競争に打勝つて他國に輸出されるが、それは比較差に於て持つ所の長所を發揮するからである。

これを要するに各別便宜分業の商品といへども國際共通貨幣の下に置かれるときは、共通の貨幣と各別生産との二つの異なる基礎から價格決定を迫られることとなるから、名目的には勿論生産費の絶對差により、實質的には一方の絶對差と他方の比較差との作用の合流によつて價格決定を見ると云ふ複雑なる事情が存する。故に金輸出禁止によつて共通貨幣が別殊貨幣に變はる場合には、實質的には比較差による價格決定が支配的となる。但しこの場合にも共通貨幣の爲替關係から引續き存立する別殊貨幣の爲替關係が、名目的に絶對差による價格決定事情を支持するから、貨幣交通形式の變化が直ちに價格決定事情を一變せしめることにはならない。されど別殊貨幣の爲替關係が暫らく續く間には、獨立的決定力を失へる爲替相場がその決定を貿易關係に仰ぎ、その貿易關係は貿易價格によつて伸縮し、その價格は實質的には生産費の比較差を根據とするのである。この根據を外にしては何が價格決定をなすか、理解されない。根據を求めず唯だ相互の關係を知るのみにては、表面の現象を知るに止まり、その實相を明かにしたことはない。然るにこの實相を究明することが科學的探求の重要な任務である。